(C)河北新報社

復興と創造

みやぎ発イノベーション 6完

東日本大震災から間もなく４年がたつ。「創造的復興」を掲げる宮城県は、その実現に向け全国に先駆けて仙台空港を民営化するプロジェクトに取り組んでいる。県出資の第三セクターであるビル管理会社など２社を民間に譲渡し、空港本体の運営は国が民間に委託する。民の知恵と力で空港経営を改革し、東北ツーリズムの中核として空港と周辺地域の活性化を目指す。シリーズ「復興と創造」最終回は、「空港民営化と国際化」をテーマに対談を企画。村井嘉浩宮城県知事が国際的見識が深い２人と意見を交わした。

出席者

宮城県知事　村井　嘉浩氏
ボストン・コンサルティング・グループ日本代表　御立　尚資氏
ライフブリッジ代表取締役　桜井亮太郎氏

東北全体の繁栄を担う

空港民営化と国際化

対談編

仙台空港民営化の時代的意義

交流人口増やし活路　村井氏

村井　東北6県の人口が1千万人から25年後には700万人に減少すると予測されている。人口が減れば東北の経済は冷え込んでしまう。それを乗り越えるためには、付加価値の高い物を作って所得を上げるか、交流人口を増やすしかない。仙台空港は3000㍍の滑走路があり国内外の航空ネットワークも充実しているが、年間乗降客数は300万人で頭打ちになっている。東北地方には関東圏からの観光客は来ても、関西圏や海外は少ない。民間のノウハウを生かして空港利用を増やし、東北全体の活性化につなげたい。海外には成功事例もあるので民営化に挑むことにした。

御立　民活空港運営法には幾つか特長がある。一つは超党派で取り組んだこと。日本がアジアのゲートウェーになって交流人口を増やさないと苦しくなるという強い思いがあった。そうした背景で空港のあり方を検討した。もう一つは経営の問題。せっかく空港をつくったのに、地元から人が出ていくだけで外から入ってこない。日本の空港は本体と周辺施設がみな経営主体が違う。それらを一体化することにこだわった。着陸料を下げても便が増えてトータルでプラスになればいい。具体化第1号になる仙台空港は大変なこともあると思うが、98空港のうち、30～40がこのスキームに乗るだろう。

観光客取り戻す鍵に　桜井氏

桜井　震災前の2010年、16万人の外国人観光客が宮城を訪れ、うち親日家の台湾が3万8000人だった。震災後の13年は8万人、2万3000人と半減した。減少分を取り戻す鍵が空港民営化だと思う。外国人は日本の雪、温泉に憧れを持っているが、東北にあることを知らない。東北の魅力を6県挙げて伝えることが大切。平泉、奥入瀬、乳頭温泉、銀山温泉、大内宿と東北には外国人が好んで行くような場所が点在し、仙台はショッピングツーリズムに向いている。周遊するシステムを東北でつくる。民営化して格安航空会社（LCC）で外国人が東京を経由しないで仙台に来るようになればいい。

御立　日本に98空港も必要かという指摘もある。甘いと言われるが造ったものは仕方ないので地元の財産として使わないと損だと思う。何のための空港で、どう使っていくかが重要。これから健全な競争が起きる。2020年の東京五輪までに東北をどう周遊してもらうかの仕組みをつくる。複数の空港をまとめて経営し、トータルで客が増えるように使い分ける考えも大変なことだ。日本の空港はスペーン空港で、広大な敷地内に鉄道もあり24時間運用型。もう一つはそこからわずか100㌔の場所に位置するゴールドコースト空港。敷地はブリスベーン空港の約10分の1で運用時間も制限されていたが、LCCの要望に沿った空港づくりに努めるとともに、さまざまな収益改善策に取り組んでおり、見習うべき点が多かった。特に感心したのは、航空券を持たない一般客でも検査を受ければ保安区域内の待合スペースに入れるシステム。この待合スペースに飲食・物販店を集中配置し、売り上げ増加につなげていた。着陸料を下げ、旅客を増やし、利益につなげる。ゴールドコースト空港はこうした明確な経営方針の下、16年で3倍の577万人まで年間旅客数を増やしていた。

桜井　宮城県内の宿泊施設、飲食店、物販店を対象にカタカナ英語を使ったおもてなし研修をしている。研修で気付いたのが、宮城に外国人は来ないと思っている人が多いこと。観光資源に自信がないのだと思う。東京から富士山・京都・大阪、名古屋から飛騨高山・富山アルペン・金沢といった代表的観光ルートがあるが、東にはない。自信を持っていない所には外国人観光客は来ない。蔵王の樹氷、白石の蔵王キツネ村など外国人に大人気の場所はあるし、源泉が10も湧く鳴子温泉もある。自分の地域の魅力を知って伝えることが一番のおもてなしになる。日本語でいいから身ぶり手ぶりでカジュアルに接してほしい。

交流人口拡大と国際化戦略

桜井　「震災」が、観光客や交流人口の増加に大きな役割を果たすと考えている。一つの例となるのが広島だ。原爆で多くの人が犠牲になった記憶をとどめておこう、後世に伝えようと原爆ドームや資料館など記録を残しており、欧米人を中心に多くの外国人が足を運んでいる。後世に伝える仕組みを整えることが、大きな意味での観光につながるのではないか。

村井　仙台空港が目指す将来像のキーワードは「東北」と「防災」だ。宮城の空港ではなく、東北の空港と位置付けている。仙台空港から東北に入り他の空港から出て行く、または、他の空港から入り仙台空港から出て行くという形をつくりたい。航空ネットワークが拡充し利用者が増えると接続交通や宿泊施設の収益が増えるし、機材の大型化などで輸送コストが低減されれば、東北の産品をより多く飛行機で国内外へ運べるようになる。単に利用者を増やせばいいのではなく東北全体が潤うための拠点にしたい。防災の観点では、災害支援への恩返しにもなる。

御立　宮城は住みやすく、企業が進出を考えやすい。さらに、東北大もある。例えば、外国人留学生を現在の何倍も受け入れ、そのうち何割かが卒業後も残って働いていれば、暮らしやすい土地だと海外にも認知されるようになる。こういった大きな流れをつくることも必要だろう。

外国人の発信力期待　御立氏

「SENDAI」起点の広域観光

御立　外国人観光客を増やすために効果的な施策は三つある。一つは、地元の人に地元の良さを再発見してもらえるような運動をすること。二つ目は、地元の人が気がついていない良さを外国人に見つけてもらうこと。アジアのカリスマブロガーを招き1カ月自由に旅行してもらったら、すごく面白いものを見つけて来ると思う。ネットでの口コミの影響は大きく、外国人がいいと思うものを彼らに発信してもらうのは効果的だ。三つ目は、コンテンツに登場する仕掛けにできるだけ協力すること。北海道にリピーターが多いのは、テレビドラマや映画の舞台となり、あそこに行きたいというあこがれを創ったからだ。

桜井　外国人観光客が行きたいと思う場所をPRすることが重要だ。例えば、ドラッグストアや家電量販店などを巡るツアーは人気だが、これらが仙台にあると知らない人もいる。仙台にはブランド店やアウトレットモールが複数あり、周辺には大自然があり、最高の食材は首都圏より安く味わえる。地元の人がこういった魅力のある土地だと外に発信しなければ、外国人には来てもらえない。

村井　東北全体の繁栄を考えた時に、民営化した仙台空港は大きなツールになる。東北観光推進機構を設けるなど6県が一体となって観光振興に取り組む機運は高まっており、民営化をきっかけにより連携を深めたい。民営化開始の2016年には、運営権者と協力した航空版の観光キャンペーンを企画している。ストーリー性のある広域観光ルートや、バスで東北各県と結ぶ周遊ルートを構築したい。仙台空港を民営化して東北6県がよくなったと言ってもらえるよう、頑張っていく。

交流人口拡大と国際化戦略

アジアから日本への医療ツーリズムの期待感は大きい。LCCが就航すれば、東北大病院などのレベルの高い医師に検診してもらいたいという富裕層は多いだろう。宮城は食材も豊かだし、活用できる資源がたくさんある。長期にわたって勝ち続けられる組み立てを、官民で協力しつくっていくことが重要だ。

シリーズ「復興と創造―みやぎ発イノベーション」は、今回で終了します。昨年10月から創造的復興に向かう現場ルポ編、対談編を交互に3回ずつ掲載。宮城の産業の新たな息吹を紹介してきました。企画は河北新報社企画事業部、協力は宮城県。

さくらい・りょうたろう氏　1973年、仙台市出身。15歳で単身渡米。英国リッチモンド大卒業。独や豪州のIT企業、外資金融機関を経て、06年故郷仙台でライフブリッジ設立。訪日外国人集客アドバイザリーや翻訳、グローバル人材紹介事業を展開。

みたち・たかし氏　1957年、兵庫県出身。京都大卒。ハーバード大MBA。日本航空を経てボストン・コンサルティング・グループ入社。05年から同日本代表。国の「空港運営のあり方に関する検討会」の座長を務め、民活空港運営法の土台を固めた。